

アメリカの *Harper's Weekly* から見る 開国から維新への日本形象

——武士からジェントルマンへ——

陳 其 松

*Who Made the Samurai Gentlemen? – Viewing the Floating Identity and
Image of Japanese in Harper's Weekly*

CHEN Chi-Sung

With the Japan's debut on the international stage in 1854, the image of Japanese frequently appeared in pictorials, a medium that initially became popular in the 1840s. Through focusing on one of these famous pictorials, *Harper's Weekly*, we can see how the image of Japanese changed over time. At the beginning, the Japanese attired in "traditional samurai costume" were considered a primitive race and depicted with dark skin and twisted faces. After the Meiji Restoration, however, modernizing Japan strove to shed the image of the "premodern." Accordingly, editorial comments and the tone of the illustrations of the Japanese also became accepting. These pictures are not simply evidence of Japan's modernization, but trace its drifting from the periphery to the center of World history in the 19th century.

キーワード：オリエンタリズム、絵入新聞、岩倉使節団、ハーパーズ・ウィークリー

はじめに

1853年米東インド艦隊司令官、マシュー・C・ペリー（Matthew Calbraith Perry, 1794-1858）が四艘の軍艦を率い、横須賀に上陸した。翌年、日米和親条約の締結によって、日本はアメリカの極東同盟国として国際社会に参入した。西洋からの衝撃と挑戦を真正面から受け止めようとする日本は、曲折があったが、東アジアにおいて最初に近代化の道のりを歩みだした。

アメリカは日本の鎖国体制を開き、日本と近代条約を最初に締結した国であるため、日本の発展に期待があった。そして1860年の遣米使節団、1871年の岩倉使節団を契機に、日本への意識が高まり、アメリカ絵入り新聞に数多くの日本関連図像が残された。しかし、「姿」は、視角によって、大きく変わってくるものである。逆に言えば、アメリカが描いた日本の形象は、「日本」を表すと同時に、アメリカの

「視角」をも露呈していったのである。

アメリカ新聞紙については、岩倉使節団の関連研究が一番多く取り上げている。例えば『トミーという名の日本人一日米修好史話一』（金井圓，1979）は、1860年遣米使節団の随員の一人、立石斧次郎の新聞肖像を取り上げ、使節団の見聞を再現している。資料集はまたそれほど多くはないが、アメリカ新聞紙にある中国人図像を元に編集した『カミング・マン 19世紀アメリカの政治諷刺漫画のなかの中国人』（Philip R.Choy, 1997）などがある。しかし、いずれも「事件」を基軸とし、長期間に渡るアメリカの「意識変化」には言及していない。

それゆえ、本論文は、1857-1877年の *Harper's Weekly* に掲載された日本図像を選び出し、開国期から明治初期にかけて、新聞図像に見る日本人の姿とその推移を紹介し、東アジアに対するアメリカの意識変化という新聞図像史の一端を明らかにするものである。

一、アメリカにおける絵入り新聞の刊行について

19世紀以前の新聞紙は基本的に文字記事によって構成されていた。活字印刷がすでに普及したものの、図像は依然として木版やエッチングなどの伝統印刷法に頼らなければならなかった。任意に組み替えられる活字とは違い、図版の製作はかなり時間を費やす作業であるため、時効性を重視する新聞紙には不向きであった。だが、稀に見る新聞図像はよく読者の目を引き、売れ行きを促進する効果があることは、すでに注目されていた。ただ技術的革新がない上、真の意味での「図像新聞」は雲の架け橋のようであった。

1842年、イラストレイテド・ロンドン・ニュース (*Illustrated London News*、以下 *ILN* と略称する) が世界最初の絵入り週刊新聞として、イギリスで発足した。*ILN* の登場によって、西洋の新聞紙は大きな転換期を迎えた。同紙は、木版を分割し、別々に製版してから組み合わせる分工作業の導入により、初めて図像と文字印刷のタイムラグを克服した。*ILN* の成功に刺激を受け、1840、50年代からは、絵入り新聞紙が大量に出回り、たちまちのうちにヨーロッパ諸国にも図像新聞が広まった。アメリカにも1851年に *Gleason's Pictorial*¹⁾、1855年に *Frank Leslie's Weekly*²⁾ などの新聞紙が出版された。それで、元々文字を中心とした新聞紙が徐々に図像新聞に移行し、図と文の配合という近代新聞紙の形が成立した。*Harper's Weekly* の誕生はこの絵入新聞ブームを背景としたのである。

Harper's Weekly の創業者はジェームス・ハーパー (James Harper, 1795-1869) とジョン・ハーパー (John Harper, 1797-1875) の兄弟である。彼らは1817年にニューヨークで J. & J. Harper という小さな事務所を開いた。1833年には Harper & Brothers と改名する。現在の Harper-Collins 出版社の前身である。1850年、*Harper's New Monthly Magazine* という月刊誌を出版し、挿絵も掲載した。高い人気を

1) *ILN* の影響を受けたアメリカ早期の絵入り新聞の一つ。フレデリック・グリーソン (Frederick Gleason, 1817-1896) とマチュール・マリー・バロウ (Maturin Murray Ballou, 1820-1895) が共同創立。1855年バロウが新聞の所有権を買収し、*Ballou's Pictorial* と改名させた。

2) 創業者のフランク・レスリー (Frank Leslie, 1821 - 1880) はイギリス人。本名はヘンリー・カーター (Henry Carter)。アメリカに渡航する前に、*ILN* の製版者を務めたことがあった。

博した *Frank Leslie's Weekly* などの週刊新聞を意識し、1857年に *Harper's Weekly*（副題：A Journal of Civilization）を刊行した。後に *Frank Leslie's Weekly* と匹敵できる新聞紙まで発展した。

人気メディアである *Harper's Weekly* の政治、社会的影響も目立っていた。黒人奴隷問題に弱腰だと批判された同紙の政治的立場が、南北戦争の勃発を契機に一転した。特に内戦中リンカンが率いた北軍に対する熱狂的な支援は有名である。それに、1859年から起用した風刺漫画家、トーマス・ナスト（Thomas Nast, 1840-1902）の世相を斬るイラストが庶民層に多くの支持を得た。彼の精力的活動により、ニューヨークの政閥、ウイリアム・M・ツイード（William M. Tweed, 1823-1878）の汚職事件が起訴された。ナストのイラストに手を焼いたツイードなどは暴言さえも吐いたという³⁾。またナストが支持した、共和党のユリシーズ・S・グラント（Ulysses Simpson Grant, 1822-1885）と民主党のスティーヴン・グロバー・クリーブランド（Stephen Grover Cleveland, 1837-1908）はそれぞれ大統領に当選したため、同紙は「大統領製造者」（president maker）とも言われるほどであった。

以上が絵入り新聞の時代背景と *Harper's Weekly* が成立した経緯である。政治、社会に幅広く影響力を持った「文明の新聞」（A Journal of Civilization）は当然海外にも目を配った。次に、日本の開港とほぼ同時に創刊した *Harper's Weekly* に、如何なる日本人像が載せられたのか。150年前のアメリカの読者が見た「日本」を紹介しよう。

二、*Harper's Weekly* の日本関連図像

1. 1858-1877年 *Harper's Weekly* の日本関連図像

1857-1877年の *Harper's Weekly* を通じて、日本と関連する図像を44点抽出した。その内容は下記の【表1】の通りである。

【表1】 *Harper's Weekly* における日本図像

図像番号	図像名	掲載日
【図1】	A JAPANESE NOBLEMAN GOING A HUNTING	1858.12.11
【図2】	GENERAL VIEW OF JEDDO THE CAPTIAL OF JAPAN	
【図3】	JAPANESE LADIES	
【図4】	VIEW OF THE PALACE OF THE EMPEROR OF JAPAN	
【図5】	THE JAPANESE MERMAID	1860. 2 . 4
【図6】	OUR JAPANESE VISITORS - A STREET IN JEDDO	1860. 5 . 19
【図7】	JAPANESE NOBLEMEN	
【図8】	OUR JAPANESE VISITORS - A TEA GARDEN IN JAPAN	
【図9】	THE LANDING OF THE JAPANESE EMBASSY, WITH THE TREATY IN A BOX, AT THE NAVY YARD, WASHINGTON	
【図10】	RECEPTION OF THE JAPANESE EMBASSADORS BY THE PRESIDENT AT THE WHITE HOUSE, MAY 17, 1860	1860. 5 . 26

3) Nast, Thomas. (1978). *Thomas Nast's Christmas Drawings*. New York: Dover Publication, p. v.

図像番号	図像名	掲載日
【図11】	THE JAPANESE EMBASSADORS AND SUITE AT DINNER AT WILLARD'S, WASHINGTON	1860. 5 .26
【図12】	PRESENTATION OF AN AMERICAN LADY TO THE JAPANESE EMBASSADORS AT WILLARD'S, WASHINGTON	
【図13】	THE JAPANESE BARBER SHAVING THE HEAD OF HIS MASTER, IN THE COURT-YARD OF WILLARD'S HOTEL	
【図14】	THE JAPANESE EMBASSADORS IN THEIR STATE COSTUME	1860. 6 . 2
【図15】	OUR JAPANESE VISITOR "TOMMY" AMONG THE LADIES OF WASHINGTON	1860. 6 . 2
【図16】	OUR VISITORS	1860. 6 . 2
【図17】	"TOMMY," THE FAVORITE OF THE LADIES	1860. 6 .23
【図18】	THE JAPANESE EMBASSY AND THEIR ATTENDANTS	1860. 6 .23
【図19】	NATURAL MISTAKES	1860. 6 .30
【図20】	ARRIVAL OF THE UNITED STATES STEAM SLOOP "NIAGARA" AT JEDDO, JAPAN, WITH THE JAPANESE EMBASSADORS ON BOARD, NOVEMBER 10, 1860	1861. 2 . 9
【図21】	MAGUIRE & RISLEY'S JAPANESE TROUPE IN THEIR MARVELOUS FEATS AT THE ACADEMY OF MUSIC, NEW YORK	1867. 6 .15
【図22】	STOTS BASHI, THE NEW TYCOON OF JAPAN	1867. 9 .14
【図23】	ST.VALENTINE'S DAY- THE OLD STORY IN ALL LANDS	1868. 2 .22
【図24】	THE JAPANESE REVOLUTION - VIEW OF THE CITY OF YOKOHAMA, JAPAN	1868. 5 . 2
【図25】	THE JAPANESE REVOLUTION - PALACE OF THE TYCOON AND VIEW OF JEDDO	
【図26】	JAPANESE LADIES	1870. 3 . 5
【図27】	THE SQUARDON AT ANCHOR IN THE HARBOR OF NANGASAKI, JAPAN	1871. 7 . 8
【図28】	THE COREAN SAILORS RESCUED FROM A SINKING JUNK	
【図29】	THE GUN-DECK OF THE FLAG-SHIP "COLORADO"	
【図30】	NEW-YEARS DAY IN JAPAN - GIRLS DRESSED AS BOYS	1872. 2 .17
【図31】	NEW-YEARS DAY IN JAPAN - THE MERCHANTS IN PROCESSION	
【図32】	NEW-YEARS DAY IN JAPAN - THE DOG OF HIMURA	
【図33】	OUR JAPANESE VISITORS - FROM PHOTOGRAPHS BY BRADLEY & RULOFSON, SAN FRANCISCO	1872. 3 .16
【図34】	OUR JAPANESE VISITORS - FROM PHOTOGRAPHS BY BRADLEY & RULOFSON, SAN FRANCISCO	
【図35】	A VISIT TO THE MIKADO OF JAPAN	1872. 5 .25
【図36】	MODE OF SETTING DISPUTES IN DIFFERENT COUNTRIES	1872.12.21
【図37】	A JAPANESE BALLET AT THE THEATRE OF KYOTO	1873. 3 .15
【図38】	AN EXECUTION AT YOKOHAMA	1875. 2 .13
【図39】	THE MIKADO OF JAPAN	1875. 3 .27
【図40】	THE EMPRESS OF JAPAN	
【図41】	A CLOWN'S CRICKET-MATCH	1875. 7 .10
【図42】	SAILORS OF THE "CHALLENGER" AT A TEA-HOUSE NEAR YOKOHAMA, JAPAN	1877. 2 .10
【図43】	OUR ARTIST AT KIOTO, JAPAN	1877. 5 . 5
【図44】	A CONFLAGRATION IN A JAPANESE CITY	1877.11.10

【表1】から *Harper's Weekly* における日本の開国から明治維新初期までの30年間の軌跡がわかる。図像のテーマは一見雑多に見られるかもしれないが、描写の傾向と時代背景により四つの時期に分けるこ

とができる。それは、

1857-1860 : *Harper's Weekly* の初期日本印象

1860-1861 : 「黒き」日本人

1861-1867 : 南北戦争による空白期



1867-1877 : 光明たる日本人

である。そこで、図像と文献を参照しながら、各時期の日本人形象の変化について検証したい。

2. 1857-1860年 : *Harper's Weekly* の初期日本形象

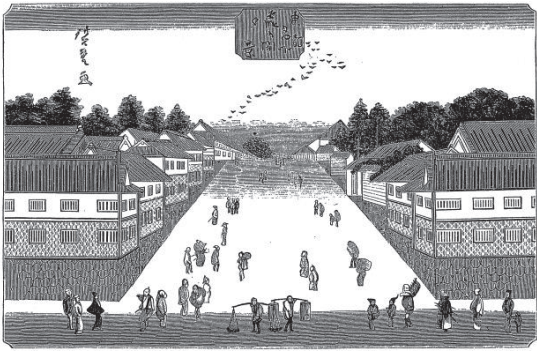




「鎖国」政策を保持していたためか、西洋の近世日本イメージは長らく流出された日本文物や漂流民、宣教師など断片的な情報によるものが多かった。1859年横浜、長崎、箱館の開港によって日米貿易は活発になったが、開港直後では、安定した図像情報源をまだ確保できなかった⁴⁾。しかし、極東の神秘国日本への情報需要に対応を求められたため、*Harper's Weekly* はある方法で読者の好奇心を満足させた。その方法とは、他の出版物から引用することであった。（【表2】）

【表2】 1857-1860 *Harper's Weekly* の引用図像について

<i>Harper's Weekly</i>	他の西洋出版物
 <p>【図3】 JAPANESE LADIES (1858.12.11)</p>	 <p>【図A】 Jeune femme et jeune japonaises⁵⁾ (1857.10.24)</p>

4) *ILN*でも1861年チャールズ・ワグマン（Charles Wirgman, 1832-1891）を駐在記者として派遣するまでに、即時的な日本新聞図像が少なく、芸術品、文献からの転写、或いは想像図など、間接的な情報で読者提供した。

5) *Le Monde Illustré*, 1857.10.24

Harper's Weekly	他の西洋出版物
 <p>OUR JAPANESE VISITORS—A STREET IN JEDDO.—[FROM A JAPANESE DRAWING.]</p> <p>【図6】 OUR JAPANESE VISITORS - A STREET IN JEDDO (1860.5.19)</p>	 <p>A STREET IN THE PRINCES' QUARTER, JEDDO. FROM A DRAWING BY A NATIVE ARTIST⁶⁾</p> <p>【図B】 A STREET IN THE PRINCE QUARTER, JEDDO. FROM A DRAWING BY A NATIVE ARTIST⁶⁾ (1858.11.27)</p>
	 <p>【図C】 東都名所霞か関夕景⁷⁾</p>
 <p>JAPANESE NOBLEMEN.</p> <p>【図7】 JAPANESE NOBLEMEN (1860.5.19)</p>	 <p>Namoura, Third Interpreter, Yoku-hama.</p> <p>【図D】 Namoura, Third Interpreter, Yoku-hama⁸⁾ (1856)</p>

6) *ILN*, 1858.11.27

7) http://homepage3.nifty.com/morikawa_works/hiroshige58.html から転用。

8) Perry, M. C. (1856). *The Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*. Washington: Senate Printer. p. 373.

【表2】に見られるように、この時期に掲載された図像の多くは二次引用されたものであることがわかる。例えば1858年12月11日の【図3】（JAPANESE LADIES）は、すでに一年前にフランスの新聞紙、*Le Monde Illustré*に見られた。直接引用したかどうかは不明だが、【図3】は下部がトリミングされているが、明らかに【図A】と同じ図像である。

そして *Harper's Weekly* の【図6】と *ILN* の【図B】を見てみよう。構図的にかなり相似した【図6】と【図B】は、両方とも歌川広重の「東都名所霞か関夕景」（【図C】）から書き写したものである。原図は日本絵師のものと記述もあり、【図6】の左上に「広重 画」という落款から推測できる。ただし画風からいうと、*Harper's Weekly* の【図6】は原図に忠実で、浮世絵風の図像であるのに対し、*ILN* の【図B】は西洋絵画の遠近法や陰影の写生技法でアレンジされ、より写実風の新聞図像となった。

最後の【図7】は「日本の貴族」（JAPANESE NOBLEMEN）という題名で掲載されたが、実際は直接に M. C. Perry の『日本遠征記』（*The Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, 1856*）から再録したものである。しかも、野村という名の通訳の図像のはずであるが、*Harper's Weekly* では「日本貴族」（JAPANESE NOBLEMEN）という題名で掲載した。

以上各図像を他の出版物の掲載図像と比較した結果、*Harper's Weekly* の初期日本図像は直接の情報源が未だ少く、他の出版物から転用したことが分かる。数少ない日本情報を読者に提供することが主な目的で、この時期の図像は *Harper's Weekly* の独自の日本観の生成に至ったとはいいがたい。

3. 1860-1861年：「黒き」日本人

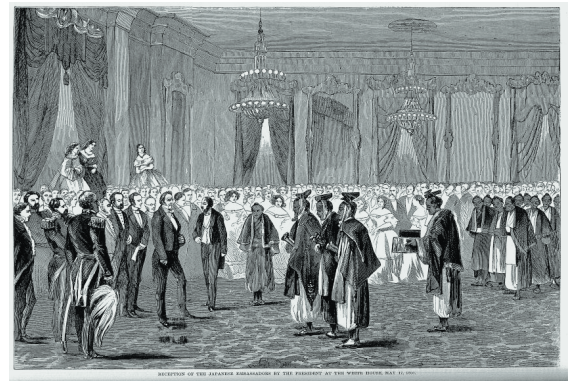
前述の状況はある「貴客」のアメリカ到来によって一変した。「貴客」というのは、日本開国後最初に派遣された、1860年の万延元年使節団である。日米修好通商条約の批准書を交換するため、新見正興（1822-1869）が正使、村垣範正（1813-1880）を副使、小栗忠順（1827-1868）が目付役と任命され、総勢77名の使節団がアメリカに渡った。使節一行がアメリカの軍艦ポーハタン号（*Powhatan*）で横浜からハワイを経て、サンフランシスコへ到着。そしてパナマ、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨークを遍歴し、ナイアガラ号（*Niagara*）でジャカルタ、香港などを経由し、世界一周して帰国した。

約半年あまりのアメリカ訪問は、日米関係において画期的な出来事であった。東アジアの新しい窓口として期待された日本の公式訪問団の到来は大きな話題を呼んだ。各新聞紙も日本訪問団の動向に目をつけ、民衆の底なき好奇心を満足させようとした。*Harper's Weekly* も当然遅れをとるわけにはいかなかった。1860年5月26日使節団がワシントンに到着してから、1861年2月9日まで、12点の使節団関連の図像を掲載した。その内容は使節団がワシントンに到着（【図9】）、大統領府に謁見（【図10】）、宴会（【図11】）、など公開行事の他、日本人散髪の様子（【図13】）、大使の朝服（【図14】）、など日本の風習にも目を配った。また有名な「トミー⁹⁾」の肖像（【図17】）、そして漫画（【図16】【図19-1】【図19-2】）などがあった。

9) 随員の一人、立石斧次郎のことである。彼がアメリカで引き起こした「熱狂」については、金井圓の『トミーという名の日本人——日米修好史話——』を参照されたい。



【図9】



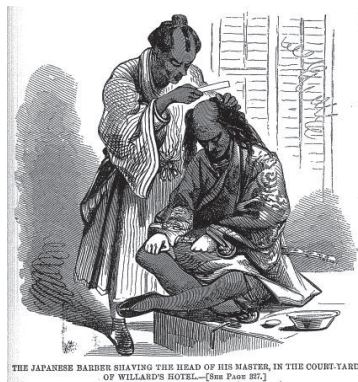
【図10】



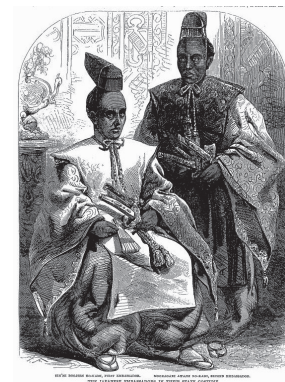
【図11】



【図12】



【図13】



【図14】



【図15】



【図17】

A. 図像から見る日本人の「他者性」

12点の図像を見た時、気になったのは、この時期の日本人は全て黒く描かれていることである。例えば【図9】、【図10】、【図11】、【図12】、【図15】はすべて使節団がワシントンでの活動の図であるが、日本人の顔はすべて黒く塗りつぶされている。図面にあった日本人と西洋人のコントラストは、まさに光と影のように強かった。しかも、【図13】、【図14】と【図17】のような日本人だけの肖像画でも黒く描かれた。これは、非西洋人を描くとき、西洋の新聞紙はよく彼らの肌色を濃くし、区別をつけようとしたわけである¹⁰⁾。

しかし、この描き方は時に、客観的に有色人種を分別するだけではない。濃い肌色は文化的差別と繋がっている。使節団の訪問とともに掲載した風刺漫画、【図19-1】を例として取り上げたい。あるレストランで、アメリカの紳士が「おい、黒んぼ、こっち！」と、黒人らしいウェイターを呼んだ。しかしこの「有色のジェントルマン」(Colored Gentleman)は、「黒んぼ！違いますよお客さん。私は日本人なんですよ！」と答えた。かなり差別的な図像であった。

【19-1】は南北戦争前夜に刊行されたため、黒人に対する差別意識は予想され、日本人もこの場面に取り上げられたのは実に興味深い。このアメリカ人が、外見でウェイターを黒人と「誤認」した。実際に起こるようでもない「当然な勘違い」(Natural mistakes)を描いた絵師が、当然この違いは非合理であることが理解されると思う。それでもわざと黒人と日本人を混同させる理由は、日本人と黒人は同じく有色人種であり、文化的にも未開という側面を強調させ、アイロニカルな効果を狙うためであろう。つまり、図の作者が、両者の形象の混同を通じて、極東から来た日本人の「他者性」を、意識的に強調しようとした。

なお、キャラクターの名付け方にも注目したい。「有色のジェントルマン」(Colored Gentleman)と「ジェントルマン」は肌色で区別することがはっきりと示されている。黒い肌色は、単なる生物的特徴か



【図19-1】 【図19-2】

10) イギリスの *ILN*、アメリカの *Harper's Weekly*、フランスの *Le Monde Illustré* などの欧米大手図像新聞はすべてこの傾向がある。

ら文化、人種優劣のシンボルとされており、日本人の他者性を現す機能が働いていた。「黒」と「未開」の連結は、つぎに紹介する【図16】により具現化されている。

B. 光と影の文明図

1860年6月2日の「訪問者たち」(OUR VISITORS、【図16】)は、この頃のアメリカの日本意識をより鮮明に反映した一点である。図面の中央にタバコを銜えているアメリカ人男性がテーブルに肘を付いていて、「文明の新聞」、*Harper's Weekly*を手になっている。天井から吊り下げたシャンデリアに「文学」(Literature)、「芸術」(Art)、「商業」(Commerce) 三つの電球が光っている。そしてシャンデリアから下のランプに電線が繋がっていて、「文明」(Civilization)の光を放っている。後ろの壁に蒸気船の絵、横の棚に機関車の模型が見える。

この「文明的」な部屋の入り口にある風変わりな人物がいる。肌色が黒く、顔つきもアジア系よりアフリカ系の方に似ており、中国の布靴を履いている¹¹⁾が、和服、丁髷と脇差は日本人を思わせる。燭台を持っていた彼は、アメリカ人のジョナサンに「ちょっと光を分けていただけませんか」と言っている。

【図16】の画題は、見たとおりに、未開社会の日本は、西洋の工業大国アメリカに啓蒙を求めにくるのである。風変わりな服装、黒人に近い肌色と顔つき、燭台などは、いずれも意識的に日本の未開さを強調している。彼の存在はこの「文明」のショールームとはかなり対照的となる。また、このシーンから「文明的」なアメリカが先進国として、「未開」な日本に文明の火を貸そうという自覚と自負も伝えている¹²⁾。前述の【19-1】と参照すれば、光を求める黒き日本人の姿はまさに共通している。1860年のアメリカが理解した日本のイメージをこれほど具象的に伝える図は他にはないであろう。



【図16】

11) 恐らく初期日本人の印象はまだ定着せず、絵師が中国のイメージと混同したのかもしれない。

12) この姿勢は、明治政府初期にアメリカから多く専門家を招致する政策にも一貫性が見える。例えば伊藤博文の要請に応じ、来日したGeorge W. Williamsが銀行法や貨幣システムを築くことい貢献した。他にHilliard MillerとMatthew Scottは税関の設立、Dr. John C. Berryは日本の近代監獄システム、またSamuel Bryanは郵政システムなど、それぞれの分野にアメリカの専門家が活躍していた。

以上から、1860-1861年の *Harper's Weekly* の万延元年使節団の関連図像は、日本の「他者性」を強く意識し、描かれていることが分かる。前の時期より日本を近距離で接することができるが、使節団の風変わりな行動や服装などは、アメリカ人の目にはかなり怪奇的である。そのため日本人は「光」と「影」の文明図の中で薄暗い一隅に置かれた。黒く塗りつぶされた肌の色は、*Harper's Weekly* が日本人の異質性を図像を通じて具現化させた結果と言ってもよからう。

4. 1861-1867年：南北戦争による空白期

南北戦争（1861-1865）により1861-1866年の *Harper's Weekly* は日本図像掲載の空白期である。1861年リンカン（1809-1865）の大統領当選後、南部各州の共和国離脱に火蓋が切られ、アメリカが近代最大規模の内戦に突入した。*Harper's Weekly* は南部各州の読者に配慮したため、政治の立場が曖昧であったが、内戦中、北軍に熱狂的に声援したのに対し、南軍に様々な非難と風刺を浴びせた。大量の内戦図像を掲載した *Harper's Weekly* 紙が性質的に戦時宣伝紙となったため、対外関心は著しく衰えた。

一方、この時期の日本も、内憂外患で一番緊迫した時期であった。1860年井伊直弼が桜田門外の変で暗殺されて以来、幕府の威信は失墜する一方であった。国内の攘夷派を押さえきれない結果、1862年の生麦事件、1863年の薩英戦争、1864年の四国連合艦隊による下関砲撃事件など外国との衝突に発展した。しかし、西洋の軍事力の前に敗北を喫した薩摩と長州は近代化の急先鋒として目覚め、維新への推進者となった。また幕末日本最初に留学生を派遣したのもこの時期である¹³⁾。混迷ではあるが、日本の近代化の曙光が現れた時期であった。

A. 日本曲芸団の初海外巡回

1860年代後半、日本とアメリカ国内の騒乱が収束を迎えた。近代国家として成立した新しい日本と南部各州の離脱を阻止したアメリカは、それぞれ中央政権の権威を立て直した。混乱の沈静化に伴い、両国の交流は再び活発な様相を呈した。それは日本から初めて海外に渡った曲芸団、「帝国日本芸人一座」の公演紹介から伺える。

曲芸団団長のアメリカ人軽業師、リチャード・リスリー（Richard Risley, 1814-1874）は、徳川幕府が「海外渡航差許布告」を公表した1866年に早くも17名¹⁴⁾の曲芸師を率い、出国した。彼らはサンフランシスコ、パナマを経て、東海岸ニューヨーク、フィラデルフィア、ボルチモア、ワシントンなどで巡回公演を行った。1867年6月15日の「日本の手品師たち」（THE JAPANESE JUGGLERS、【図21】）の記事は、ちょうど二回目のニューヨーク公演の千秋楽の日に掲載された。

こま回し、アクロバット、綱渡り、蝴蝶使い¹⁵⁾などの芸は当時のアメリカ人にとってかなり新鮮で、

13) 幕府から1862年に榎本武揚（1836～1908）、西周（1829～1897）らをオランダに、1866年中村正直らをイギリスに送った。そして長州藩の井上馨（1835～1915）、伊藤博文（1841～1909）らは1863年、薩摩藩の五代友厚（1835～1885）、寺島宗則（1832～1893）、森有礼（1847～1889）らが1865年にイギリスへ赴いた。

14) 後見役の高野広八を入れたら、合計18名。内に男性15名、女性3名。

15) 「蝶の舞」。紙で作った蝴蝶を扇子の風で自由に操る芸。



【図21】

刺激的であった¹⁶⁾。記事には日本芸人の技を詳しく描写し、大いに讃頌した。さらに観客の好奇心を煽るため、各雑芸のイメージ図（【図21】）に一面を割り、日本のサーカスのような雰囲気を醸した。

特筆すべきなのは、この三人は手品師のとわ（35歳）、三味線のとう（20歳）、そしてこま回しのつね（9歳）である¹⁷⁾。同記事にも曲芸団の三名の女性団員について言及したため¹⁸⁾、【図21】左上のコーナーに載せた少女の肖像は彼女たちをイメージして描かれたのであろう。さらに年齢から考えたら、当時20歳で三味線を引くとうが一番可能性が高い。彼女たちは初めてアメリカに渡った日本女性として認識され、日本開国によって可能となった民間交流の一ページを飾った。

「帝国日本芸人一座」の海外巡回は、日本のローカル文化を世界に展示する¹⁹⁾ 宣伝効果があった他に、女性さえも自由に海外に行けるなどの、日本が起こした社会変化をも裏づける。公式的使節ではない、民間レベルの交流は、まさに新しい時代に向かう兆しであった。

5. 1867-1877年：光明たる日本、武士からジェントルマンへ

1867年-1877年の約十年間は、西洋新聞紙にある日本形象が一変した時期である。未開で、怪奇な黒き日本人が、西洋の光を受け、文明の姿でアメリカの読者と再会した。ただし、これは単に西洋側が変わったのではなく、日本側も自覚的に「西洋式の文明」のあり方を追求し、実践する結果である。本節

16) “The performance which is given by these Japanese Jugglers ... is both unique and defiant.” *Harper's Weekly*, 1867.6.15

17) 宮永孝『海を渡った幕末の曲芸団』（中央公論社、1999）11頁

18) “The troupe numbers seventeen, three of them being females — the first of the sex, we are assured, that were ever permitted to leave Japan.” *Ibid.*

19) “...[T]he Maguire and Risley troupe ... reveal to us a phase of the interior life of Japan which can not be otherwise gained in this country...” *Harper's Weekly*, 1867.6.15

ではアメリカの世論変化という外面的要素と、日本のアイデンティティの転換という内面的要因を検討し、この武士からジェントルマンの最後段階を検証する。

A. 光明に向けて

1868年、明治と改元した日本が体制を一新し、本格的に近代化の道程により西洋を追いかけようとした。『周易』の一節を出典とする「明治²⁰⁾」に、「光」に向い、民衆を開化させる日本の意気込みが窮える。明治政府の成立とともに、日本人の形象にドラマティックな変化が起こった。例えデイリー・イブニング・ブリティン (*Daily Evening Bulletin*) の記事を見てみよう²¹⁾。

「日本... 中国人と違い、進歩のためなら、服飾、飲食、工業、生活スタイルなどを改善する意欲がある。彼らは、一つの人種として、積極的かつ、聡明で、大胆であり、清潔な習慣を持ち、個人の名誉を重視する。しかも高官から庶民まで例外なく礼儀正しく、外国人に、特にアメリカ人に親切である。また、この点でも中国人と違うのだが、日本人は自分の国家に深い愛着を持ち、苦力をやるために故郷を離れるのではなく、知識こそ彼らが海外に赴く原因である²²⁾。」

教えを求める謙遜さや、体制、服飾まで変えられる柔軟さで、日本は高く評価された。中国と比べれば、日本はより知識を好み、外国人に親切であるとまで述べられている。ここでは、日本と中国は同じくアジアの国なのに、日本だけが賞賛された。その原因は、中国人による社会問題²³⁾ にも関係があるが、日本の「改善する意欲」、特に近代化する努力が評価されたのであろう。

日本人に対する心理的距離の変化は、図像にも見られる。「バレンタインデー—世界共通の昔話²⁴⁾」(ST. VALENTINE'S DAY- THE OLD STORY IN ALL LANDS、【図23】) には、日本がアジア諸国と一線を画されたことが判然とわかる。

新聞紙一面を割いた【図23】は1868年のバレンタインを祝うための掲載図像である。図面に時空それぞれ違う恋人たちが雲の上に佇まい、キューピットたちに囲まれている。まさに恋のパレードのようである。ただし、欧米人カップルの一番手前に、浮世絵風の日本人二人もまた佇んでいる。

バレンタインという西洋の記念日を祝う図像に日本人が描かれたことには大きな意味がある。【図23】

20) 『周易』——説卦傳「離也者明也。…聖人南面而聽天下。嚮明而治。」

21) 下記から引用：Lanman, Charles. (1872). *The Japanese in America*. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer.

22) “Japan ...Unlike the Chinese, its people readily make changes in clothing, food, manufactures, and modes of living, when they see improvement therein. They are, as a race, impulsive, highly intelligent, brave to rashness, cleanly in their habits, have a high sense of personal honour, and are universally polite, from the highest dignitary to the lowest in the land, and withal are kindly disposed toward foreigners, especially Americans. Unlike the Chinese, again, the people of Japan are warmly attached to their country, and will not emigrate on Coolie contracts, the thirst for knowledge being the incentive of those who seek foreign lands.” Ibid. 22-23頁

23) 当時中国から来た労働者は低賃金のため、アメリカの労働者たちに危機感を与えた。そして度々衝突が起こり、排華風潮まで波紋が広がった。

24) *Harper's Weekly*, 1868.2.22



【図23】

の画題は「世界共通の昔話」であるため、日本もその「世界」(All Lands)の一員であることを裏付ける。ただし、この「世界」(All Lands)は、客観的、地理的な全世界(Whole World)ではない。中国人、黒人、原住民など後進的だと思われた人種はこの盛大な恋祭りから排除された。それで、「世界」の本当の適用範囲は、むしろ「文明社会」、或いは西洋世界のほうが正しいであろう。最初のアジア近代国家日本がこの「世界」に参加できるのは、他のアジアの「後進国」と一線を画されたことを証明する。

なお、「日本の女性たち²⁵⁾」(JAPANESE LADIES、【図26】)にも日本人に好意的な記述が見える。

「挿絵に見る風変わりな人物は外出着のおしゃれな日本の女性である。彼女たちを見たら、確かに妙な感じがするが、もし日本のあるアーティストがニューヨークに来て、ブロードウェイと五番街の服装を見たら、恐らく同様に怪奇的、醜いと感じ、センスと上品さの欠如に啞然とするだろう。この半分未開(semi-civilized)の人間たちの服装を笑う前に、先に我が天朝の友が私たちのセンスとファッションに不当な批判や「外の野蛮人」と嘲っていないか、調べてみた方が良いかもしれない。グリーシャンベンドの醜さを自慢する淑女たちには日本の姉妹たちの服装を批判する資格はないであろう²⁶⁾。」

25) *Harper's Weekly*, 1870.3.5

26) “The strange figures in our illustration on this page exhibit the street costume of the fashionable ladies of Japan. They certainly present a very absurd appearance; but if a Japanese artist were to visit New York to-day, would he not find in Broadway and Fifth Avenue costumes equally grotesque and ugly, and even more deficient in the qualities of good taste and refinement? Before we laugh at the costumes of these semi-civilized people, perhaps it would be well to inquire whether our friends of the Celestial Empire are altogether unjust in styling us “outside barbarians” in matters of taste and fashion. Ladies who take delight in the hideousness of the “Grecian bend” are little right to laugh at their Japanese sisters.” *Harper's Weekly*, 1870.3.5



【図26】

この記事では日本女性の服装の特異さは認めるものの、それは自然であり、立場が変わったら私たちも同じく怪奇に思われると述べられている。ここでの姿勢は、十年ほど前とは正反対である。1860年代では、日本人の服飾から風習まで怪しい目に見られたのに、これほど多元文化論的な世論が現れるのは思いも寄らないことであつたろう。

以上から、「他者」として扱われた日本は、十年も経たない間に、西洋文化に近づいたように見えた。恋のパレードに参列にできたり、好意的な世論が出回ったなどの変化は実に興味深い。文明の光を受けた日本は、いよいよ黒い過去と決別し、西洋の「世界」に飛び込むのである。

B. 武士からジェントルマンへ

このような社会的雰囲気の中に、岩倉使節団がアメリカを訪れた。1871年12月23日、使節団一行が横浜から出発した。約三週間後の1872年1月15日にサンフランシスコに到着し、そしてアメリカ西海岸からシカゴ、ワシントン、ニューヨーク、ボストンを遍歴し、世間の脚光を浴びた。明治政府が初めて派遣した使節団は、条約改正など政治的な目的を抱えながら、新生日本を西洋諸国に宣伝する外交工作にもかなり苦心した。そのため、大使一行は公開講演で度々鉄道、服飾、政府体制、貿易の発展など日本の維新の成果を取り上げ、アピールした。それは、日本がこれから西洋のような文明国家になる可能性を提示し、西洋諸国の仲間入りを実現させようというのである。そこには、日本が西洋の進歩－後進の文明観を受容した痕跡が判然としている。これで、日本人のアイデンティティに、光と影の文明図が刻まれていた。

伊藤博文が1872年2月1日にサクラメント（Sacramento）で行った講演には下記のような一節がある。

「国によって慣習、礼儀、政体などが違うとはいえ、私たちは同じ人類という大家族の一員であり、同じ偉大なる存在に依存する。今まで、世界がかつて見なかったほどの高度な文明（nobler

civilization) に到達することこそ、我々の運命であると信じている²⁷⁾。」

わざと曖昧な言い方をしたのかもしれないが、伊藤が「偉大なる存在」(Almighty Being) とは何かを明言しなかった。ただし、この曖昧さこそ、「慣習、礼儀、政体などの違い」を解消し、「高度な文明」に日本の身を置く場所を作り出すのである。この「大家族」は、恐らくその盛大な、カーニバルのような恋パレードのメンバーを指すのであろう。

それに、西洋の新聞図像に見られた「光」と「暗闇」のメタファーを「文明」と「未開」を喩えるために、日本人も使いはじめた。例えば森有礼がまとめ、アメリカ国会に提出した日本の現状報告書に、

「日本の国民は、東方の他の国と同じように、人間の幸福を促進するために、[啓蒙の] 光 (light) はいかに重要であるのかを痛感している²⁸⁾。」

とある。また後の文章にも、

「…日本は自分が暗闇 (darkness) にいたことと、外国の諸制度が卓越していることを認めた。ゆえに、彼らは外国政府とより親密な関係を築こうとしている。当然ながらアメリカはその中の一等国だと見なされる。²⁹⁾」

とある。過去の日本と決別するため、彼らの講演には、西洋側と同じ「光」と「影」の文明構図をも転用した。「暗闇にいた」という表現は、1860年のトミーを風刺する漫画を思わせる。(【図19-2】) 真夜中に、レンガと自分の帽子さえも分別できなかったトミーも、恐らく「光の重要さ」に共感を禁じえなかったであろう。

1872年3月6日に岩倉使節団がこの文明の一等国の首都ワシントンに到着した。国会で発表した講演では日本の「東行」する理由を明言した。

「啓蒙された人民の心を基礎にすれば、政府は必ず強国となるでしょう。私たちは啓蒙の光を求め

27) "Notwithstanding the various customs, manners, and institutions of the different nations, we are all members of one large human family, and under control of the same Almighty Being, and we believe it is our common destiny to reach a yet nobler civilization than the world has yet seen." Lanman, Charles. (1872). *The Japanese in America*. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, p. 26.

28) The people of Japan, as well as all in the Orient, feel the need of increased light in regard to the more elevated interests of humanity... Lanman, Charles. (1872). *The Japanese in America*. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, p. 31.

29) The first concession made by the Japanese was an acknowledgment of the darkness in which they were, and of the superior character of foreign institutions; and the immediate result was that they desired to cement a closer friendship with foreign governments. They naturally looked upon the United States as occupying the first rank. Ibid, p. 32.

に参りました。うまく見つけられて喜んでいます。日の出の国からさらに東へ、日登りの国に旅した私たちは、いつも見てきたのとは違う、新しい朝日を見つけたのです³⁰⁾。」

ここで日差しは文明の、啓蒙の象徴として使われ、日登りは文明水準の差に喩えられた。1260年前、日没処の天子を訪ねた日本は、日昇りの国に新しい教えを求めにきた。それは、日本もいつか日昇りの国になるためであろう。その意気込みは、1月23日に伊藤博文がグランド・ホテルで行った講演に明白に現れている。

「私たちの国旗の中央にある赤い円盤は、もう閉ざされた国の上にある薄餅ではない。元々朝日をモチーフした高貴なるこの紋章には、本当に前に進み、上に昇り、世界先進国 (enlightened nations) と比肩するという意味が込められているのである³¹⁾。」

1872年3月16日に「日本訪問者たち」(OUR JAPANESE VISITORS、【図33】【図34】)すなわち岩倉使節団の主要メンバーの堂々たるスーツ姿が披露された。これが初めて、日本人が西洋化された姿で *Harper's Weekly* の読者と対面した図である。そして1875年3月27日、「新たな日本」(NEW JAPAN、【図39】【図40】)に、初めて西洋軍服姿の天皇像が載せられた。この肖像はまさに近代日本の象徴であり、日本人が「暗闇」から「光明」に転身した証拠でもある。ようやく、武士がジェントルマンとなり、光の満ちる文明の部屋に入室することができたと言えよう。



【図33】



【図34】

30) Governments are strong when built upon the hearts of an enlightened people. We came for enlightenment, and gladly find it here. Journeying eastward from the empire of sunrise toward the sun-rising, we behold a new sunrise beyond the one we before enjoyed. Ibid, p. 43.

31) The red disc in the centre of our national flag shall no longer appear like a wafer over a sealed empire, but henceforth be in fact what it is designed to be, the noble emblem of the rising sun, moving onward and upward amid the enlightened nations of the world. Ibid, p. 16.

おわりに

開国してまもなくアメリカに渡った日本人は、見物すると同時に、彼ら自身が^{みもの}見物となった。民衆の好奇心に新聞紙の宣伝が加わり、日本人のイメージが作り出されたのである。メディアの宣伝で、日本の異質性、他者性がさらに強化され、民衆の共同認識に影響した。それは、フィルターを通じ、西洋の価値観から評価し、想像し、規定した日本である。ゆえに、日本人は黒くされていたり、黒人と混同されたり、服装、風習などの違いも嘲られた。影に覆われていた日本人（【図12】など）、文明の光を借りようとする日本人（【図16】）、暗闇でさまようトミー（【図19-2】）の黒い形象は、未開、愚昧の表れとなった。

しかし、「明治」日本が、昔の黒き日本と決別し、文明的、光明な西洋化の道に走り出したとき、世論も日本の努力を歓迎し、好意的な記事と図像を掲載した。これによって日本はもはや未開で野蛮な「黒き他者」から、西洋文明圏の有望な新参者に徐々に変化したのである。列強に教えを求める日本は、進歩史観の優等生と言ってもよかろう。それゆえ、日本は【図23】のバレンタインパレードへの参列が許され、スーツ姿で堂々と西洋の読者と対面できた。このような形象変化は、日本とアメリカが同じ進歩史観・文明観を共有することで、初めて可能となったものである。岩倉使節団の講演には、文明と光明、暗闇と未開の対応関係が明白である。日本人の顔も和服の将軍から（【図22】）、西洋軍服を纏う天皇（【図39】）に変わった原動力もそこにある。しかし、日本とアメリカが近代化についての思惑を一致させた時点から、帽子を採したトミーは暗闇から脱出することができなくなった。なぜなら、この「光」と「影」の文明構図を受け入れた結果、日本人自身も自分は「黒」かったと認めなければならなかったからである。日の出ずる国が日昇りの国から借りた光で映しだしたのは、あくまでも日本人の西洋的な顔である。まさに善悪を悟ったアダムとイヴのように、日本人も、「文明」と「未開」を悟り、アイデンティティが「黒い」武士から「光る」ジェントルマンへと移行したのである。



【図22】



【図39】

【付録】 1858-1877 *Harper's Weekly* の日本関連図像

1858.12.11 VIEWS IN JAPAN



【図1】 A JAPANESE NOBLEMAN GOING A HUNTING



【図2】 GENERAL VIEW OF JEDDO THE CAPITAL OF JAPAN

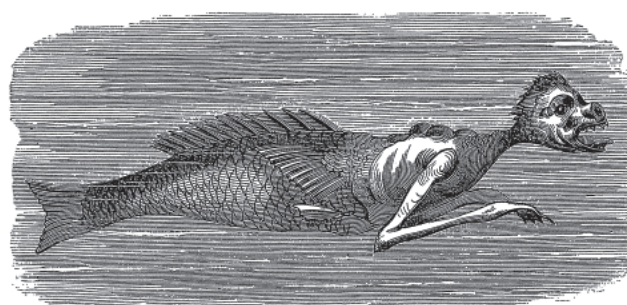


【図3】 JAPANESE LADIES



【図4】 VIEW OF THE PALACE OF THE EMPEROR OF JAPAN

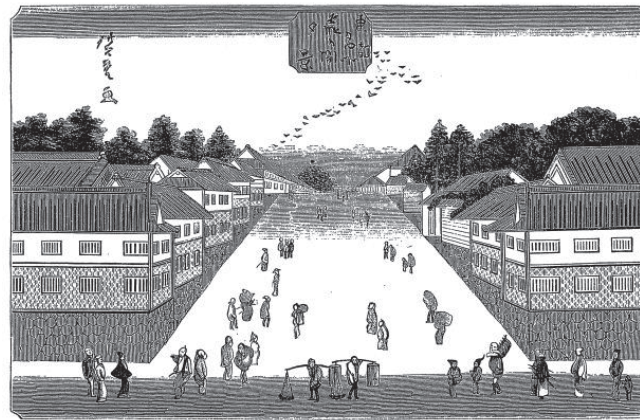
1860.2.4 THE REAL JAPANESE MERMAID



THE JAPANESE MERMAID.—[FROM A SKETCH BY DR. PHILLIPS, U.S.N.]

【図5】 THE JAPANESE MERMAID

1860.5.19 OUR JAPANESE VISITORS



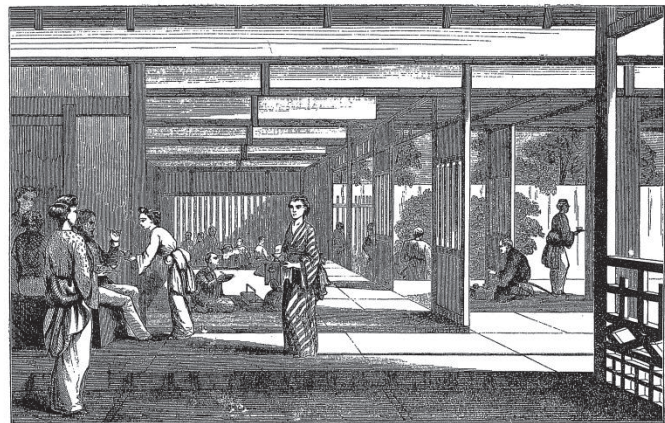
OUR JAPANESE VISITORS—A STREET IN JEDDO.—[FROM A JAPANESE DRAWING.]

【図6】OUR JAPANESE VISITORS - A STREET IN JEDDO



JAPANESE NOBLEMEN.

【図7】JAPANESE NOBLEMEN



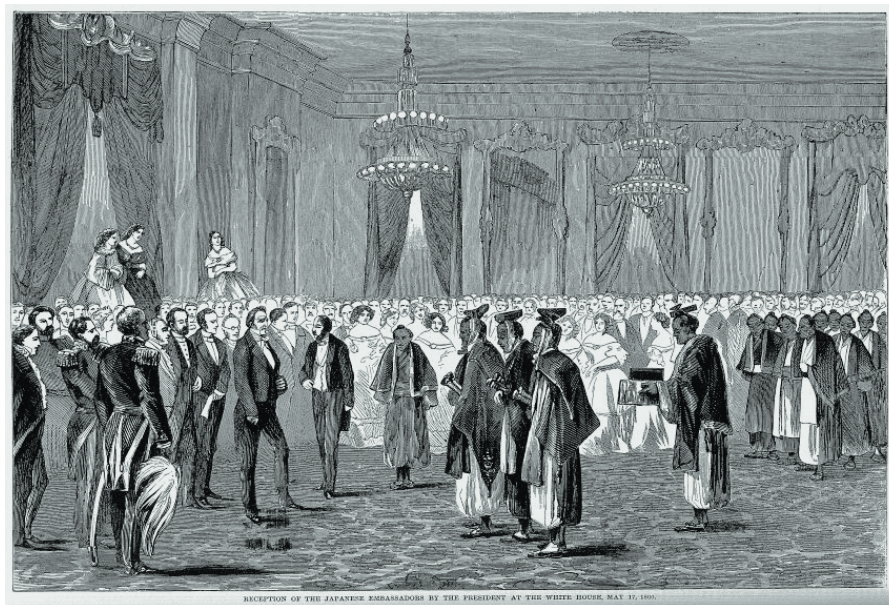
OUR JAPANESE VISITORS—A TEA-GARDEN IN JAPAN.

【図8】OUR JAPANESE VISITORS - A TEA GARDEN IN JAPAN

1860.5.26 THE JAPANESE AT WASHINGTON



【図9】THE LANDING OF THE JAPANESE EMBASSY, WITH THE TREATY IN A BOX, AT THE NAVY YARD, WASHINGTON



【図10】 RECEPTION OF THE JAPANESE EMBASSADORS BY
THE PRESIDENT AT THE WHITE HOUSE, MAY 17, 1860

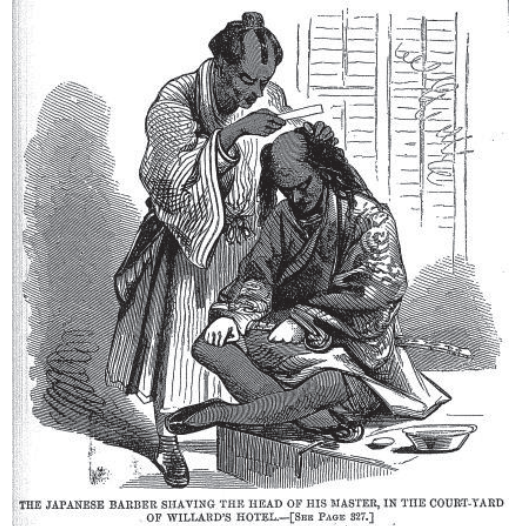
1860.5.26 JOTTINGS ABOUT THE JAPANESE



【図11】 THE JAPANESE EMBASSADORS AND SUITE AT DINNER AT
WILLARD'S, WASHINGTON



【図12】 PRESENTATION OF AN AMERICAN LADY TO THE JAPANESE EMBASSADORS AT WILLARD'S, WASHINGTON



【図13】 THE JAPANESE BARBER SHAVING THE HEAD OF HIS MASTER, IN THE COURT-YARD OF WILLARD'S HOTEL

1860.6.2 THE JAPANESE EMBASSADORS



【図14】 THE JAPANESE EMBASSADORS IN THEIR STATE COSTUME

1860.6.2 JAPANESE WHITTTLINGS



【図15】 OUR JAPANESE VISITOR "TOMMY" AMONG THE LADIES OF WASHINGTON

1860.6.2 OUR VISITORS



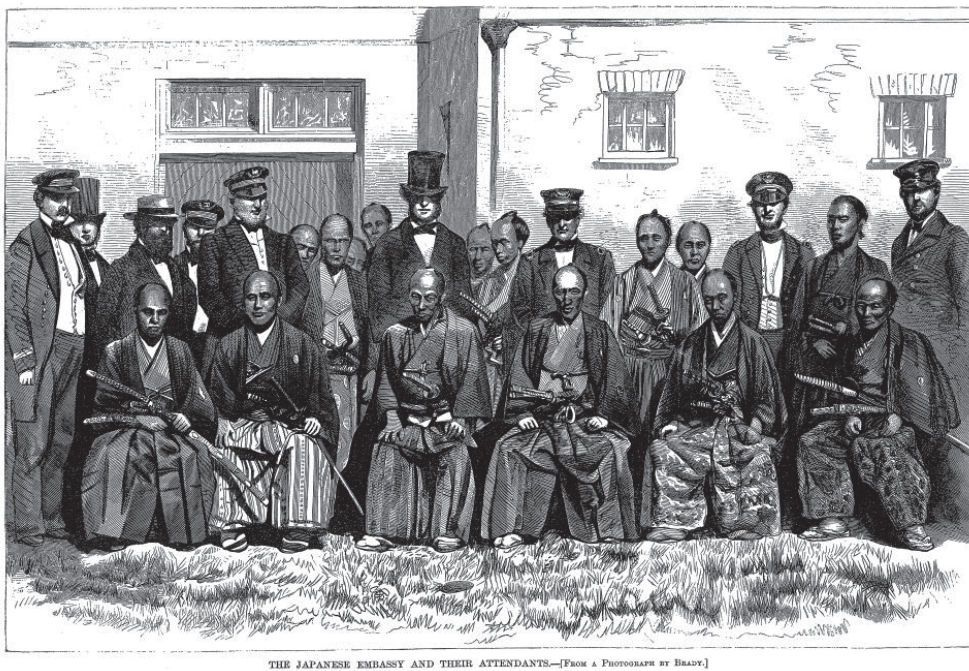
【図16】 OUR VISITORS

1860.6.23 TOMMY



【図17】“TOMMY”，THE FAVORITE OF THE LADIES

1860.6.23 THE JAPANESE EMBASSY AND THEIR ATTENDANTS



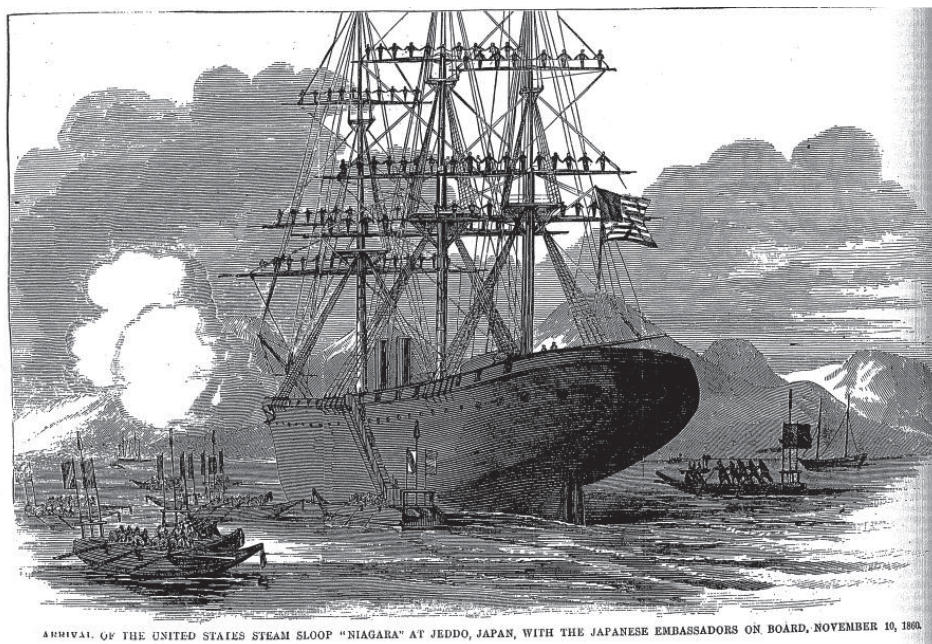
【図18】THE JAPANESE EMBASSY AND THEIR ATTENDANTS

1860.6.30 NATURAL MISTAKES



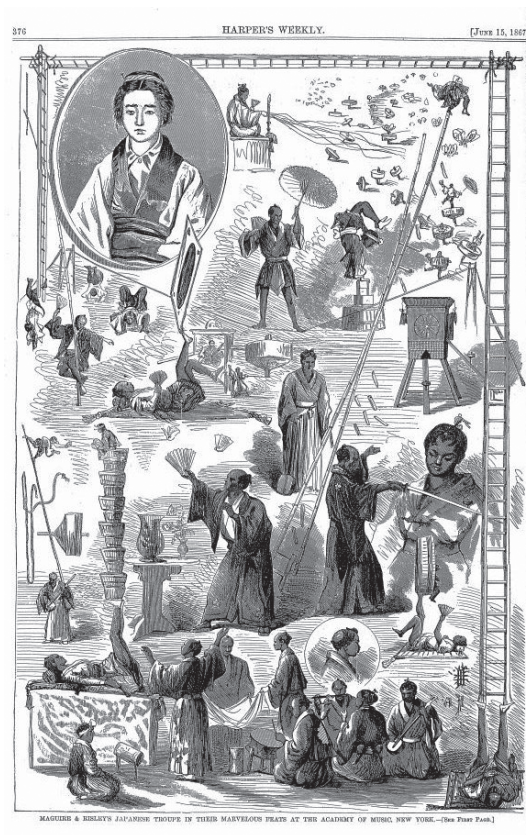
【図19-1】 【図19-2】 NATURAL MISTAKES

1861.2.9 THE ARRIVAL OF THE "NIAGARA" AT JEDDO, JAPAN



【図20】 ARRIVAL OF THE UNITED STATES STEAM SLOOP "NIAGARA"
 AT JEDDO, JAPAN, WITH THE JAPANESE EMBASSADORS ON
 BOARD, NOVEMBER 10, 1860

1867.6.15 THE JAPANESE JUGGLERS



【図21】MAGUIRE & RISLEY'S JAPANESE TROUPE IN THEIR MARVELOUS FEATS AT THE ACADEMY OF MUSIC, NEW YORK

1867.9.14 THE NEW TYCOON OF JAPAN



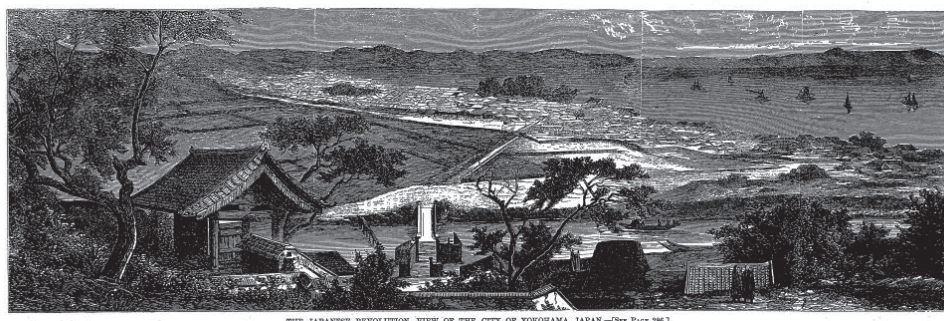
【図22】STOTS BASHI, THE NEW TYCOON OF JAPAN

1868.2.22 ST.VALENTINE'S DAY- THE OLD STORY IN ALL LANDS

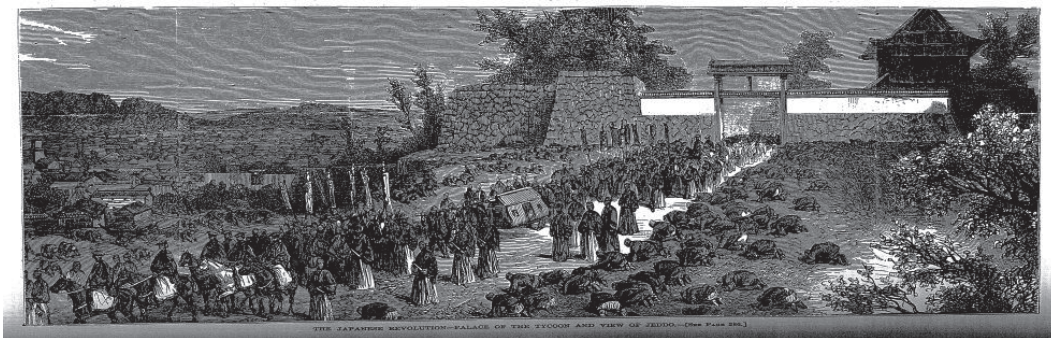


【図23】 ST.VALENTINE'S DAY- THE OLD STORY IN ALL LANDS

1868.5.2 THE JAPANESE REVOLUTION



【図24】 THE JAPANESE REVOLUTION - VIEW OF THE CITY OF YOKOHAMA, JAPAN



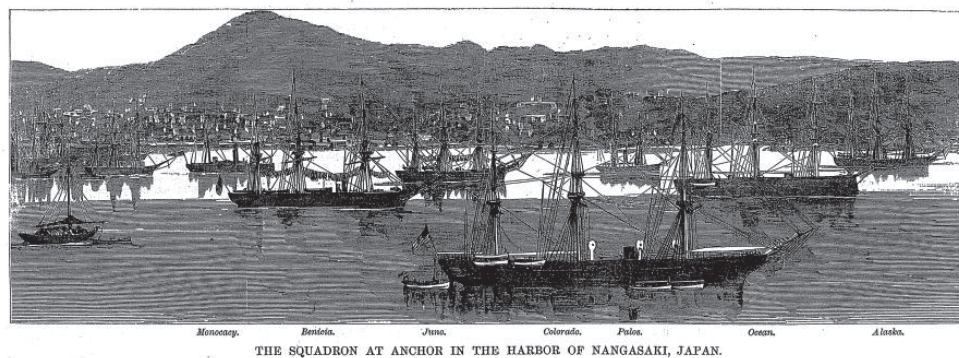
【図25】 THE JAPANESE REVOLUTION - PALACE OF THE TYCOON AND VIEW OF JEDDO

1870.3.5 JAPANESE LADIES



【図26】 JAPANESE LADIES

1871.7.8 COREA

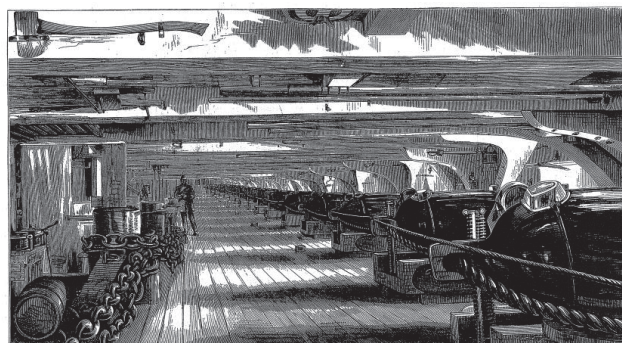


【図27】 THE SQUADRON AT ANCHOR IN THE HARBOR OF NANGASAKI, JAPAN



THE COREAN SAILORS RESCUED FROM A SINKING JUNK.

【図28】 THE COREAN SAILORS RESCUED FROM A SINKING JUNK



THE GUN-DECK OF THE FLAG-SHIP "COLORADO,"
THE UNITED STATES NAVAL AND DIPLOMATIC EXPEDITION TO COREA.

【図29】 THE GUN-DECK OF THE FLAG-SHIP "COLORADO"

1872.2.17 NEW-YEAR'S DAY IN JAPAN



NEW-YEAR'S DAY IN JAPAN—GIRLS DRESSED AS BOYS.

【図30】 NEW-YEAR'S DAY IN JAPAN - GIRLS DRESSED AS BOYS



NEW-YEAR'S DAY IN JAPAN—THE MERCHANTS IN PROCESSION.

【図31】 NEW-YEAR'S DAY IN JAPAN - THE MERCHANTS IN PROCESSION



NEW-YEAR'S DAY IN JAPAN—THE DOG OF HIMURA.

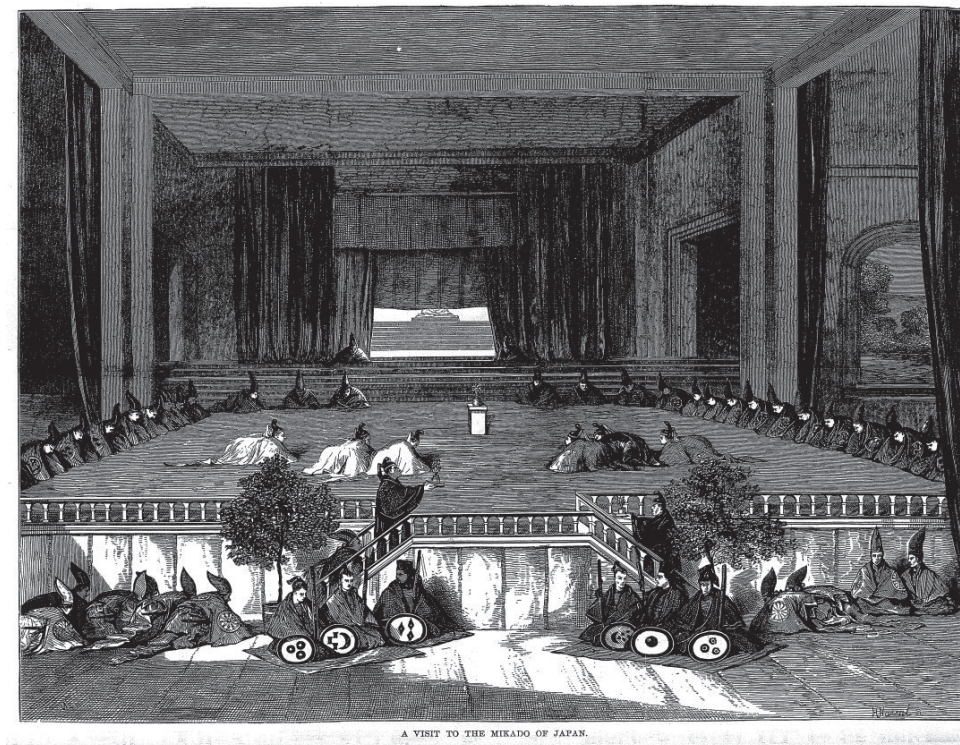
【図32】 NEW-YEAR'S DAY IN JAPAN - THE DOG OF HIMURA

1872.3.16 OUR JAPANESE VISITORS



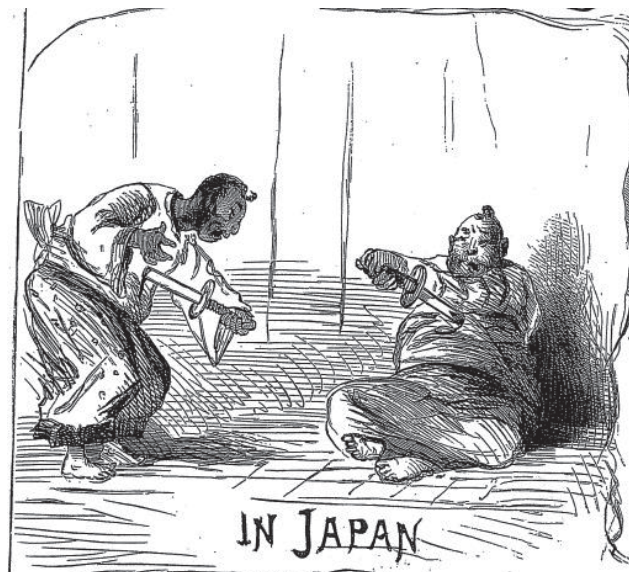
【図33】 【図34】 OUR JAPANESE VISITORS - FROM PHOTOGRAPHS BY
BRADLEY & RULOFSON, SAN FRANCISCO

1872.5.25 A VISIT TO THE MIKADO



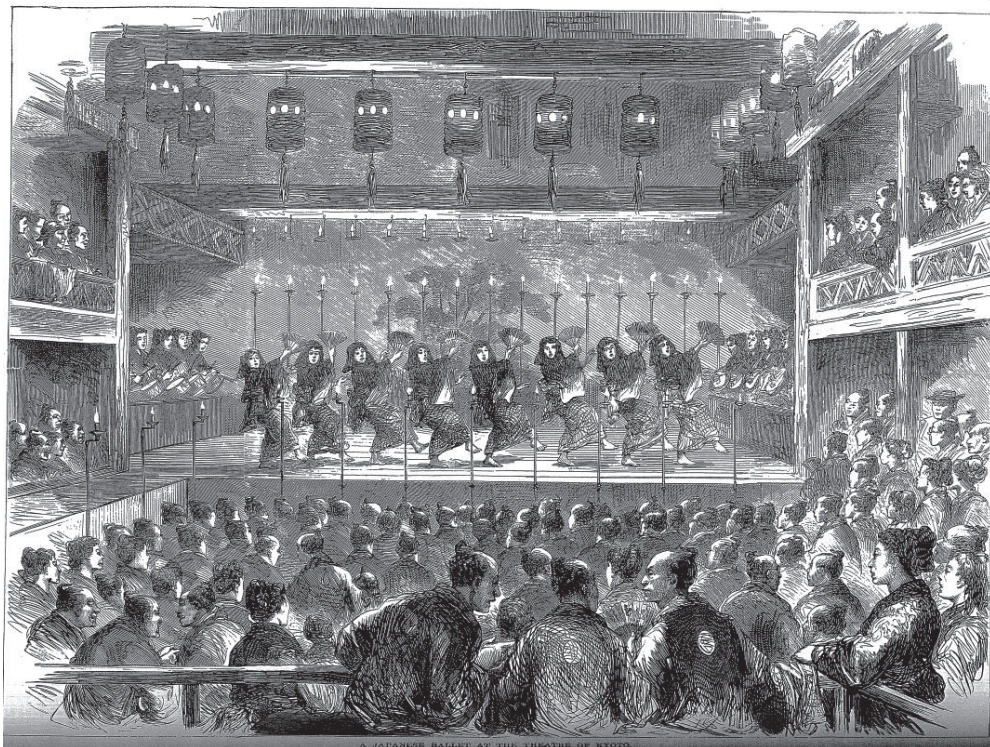
【図35】 A VISIT TO THE MIKADO OF JAPAN

1872.12.21 MODE OF SETTING DISPUTES IN DIFFERENT COUNTRIES



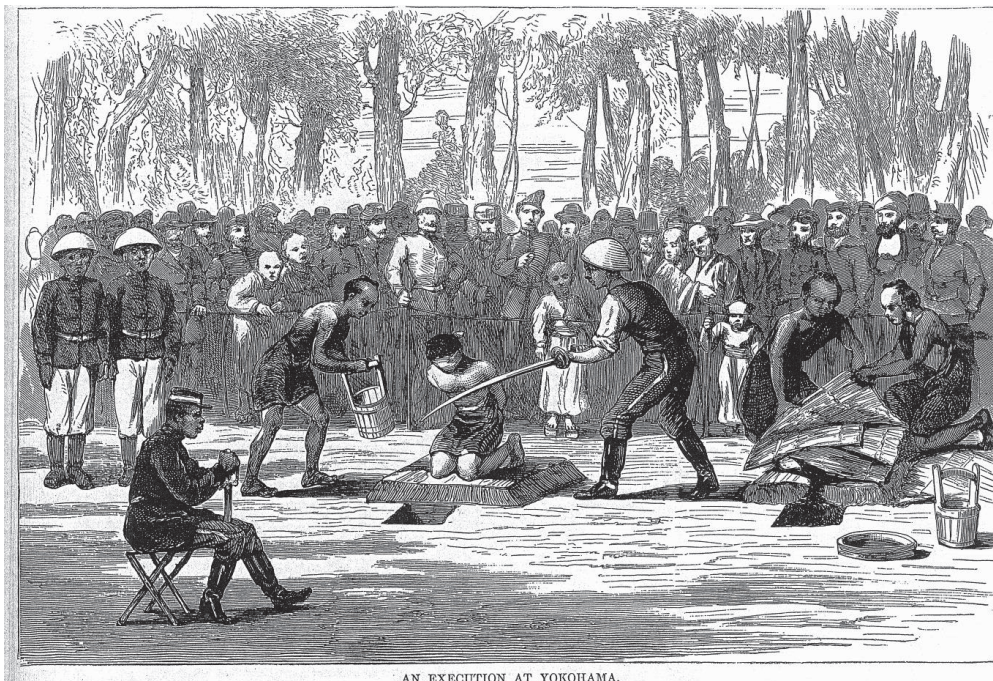
【図36】 MODE OF SETTING DISPUTES IN DIFFERENT COUNTRIES

1873.3.15 A JAPANESE BALLET



【図37】 A JAPANESE BALLET AT THE THEATRE OF KYOTO

1875.2.13 EXECUTION AT YOKOHAMA

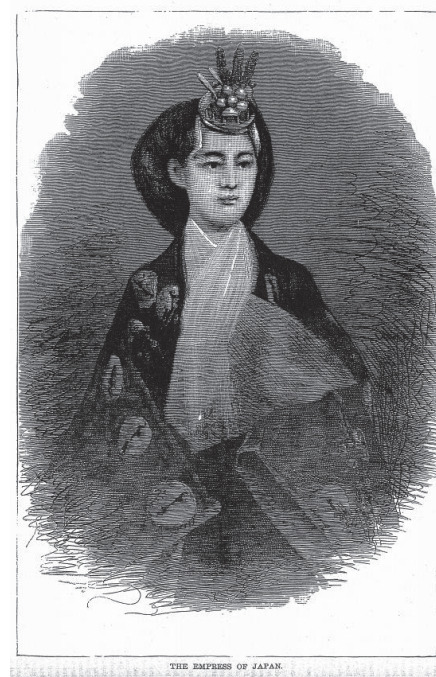


【図38】 AN EXECUTION AT YOKOHAMA

1875.3.27 NEW JAPAN



【図39】 THE MIKADO OF JAPAN



【図40】 THE EMPRESS OF JAPAN

1875.7.10 A CLOWN'S CRICKET-MATCH



【図41】 A CLOWN'S CRICKET-MATCH

1877.2.10 THE CRUISE OF THE "CHALLENGER"



SAILORS OF THE "CHALLENGER" AT A TEA-HOUSE NEAR YOKOHAMA, JAPAN.

【図42】 SAILORS OF THE "CHALLENGER" AT A TEA-HOUSE NEAR YOKOHAMA, JAPAN

1877.5.5 OUR ARTIST IN JAPAN



【図43】 OUR ARTIST AT KIOTO, JAPAN

1877.11.10 A CONFLAGRATION IN A JAPANESE CITY



【図44】 A CONFLAGRATION IN A JAPANESE CITY